

初期仏教經典にみる 世界壊滅と再成 Ⅱ

春日井真英

世界を壊滅させる災変として經典は火災、水災、風災の三つを挙げている。これら三つの災変はたがいに独立した別個のものとして述べられているが内容的には災変の及ぶ範囲に違いがあるにすぎないといえる。つまり災変はこの地上はもとより、天・空・地の三界すべてに及ぶが天全体を破壊しつくすものではない。火災変時にはその災変が「光音天」の下にまで、水災変時には「遍淨天」の下に、そして風災変時には「果実天」の下にまで及ぶという。これは地居神としての三十三天から空居天である梵加夷天までを一つの宇宙体位と見做していた地域に対し、質の異なった文化が優位的に存在していたことを意味しよう。また諸々の価値観の変換もなされたであろうが三十三天の上に焰摩天を置いたり、他化自在天と梵加夷天の中間に摩天を残していることなどは古い文化の痕跡と考えられる。この災変が惹起される原因について僅かでも触れているとすれば『大樓炭経』だけである。そこでは「天下人皆行非法邪見不正。犯十惡事。用人民皆行非法奉邪見不見正三行。行十惡事故。天雨不時節。天不雨已後。…」と記し人心の乱れが災変の原因であることが明らかである。この「災変品」の冒頭部には救済についての微妙な思想的差異を見出すことができる。

火災変の時「大黒風」もしくは「大乱風」が吹き、大海の底から日宮殿つまり太陽を一つまた一つと掘り出し須弥山のなかばに据える。ここでは神格化された存在が、破壊のためにその猛威をふるうわけではない。「大黒風」と名づけられた風が海底から太陽を出現させるが、この部分は「乳海攪拌」の神話を連想させる。世界はこの風のため第二の太陽が出現し、「小河汙濁渠流皆悉乾竭」する。（長阿含卷21）時を経て「風」が第三の太陽を出現させると、諸大水、恒河、耶婆那河等が干上ってしまう。第四のそれは諸水源、善見大池、阿耨大池等の神的存在の住いである大池さえも乾し、災変が人間界ばかりでなく神界にも及んでいくことを示している。そして第五の太陽が現われるとこの世界を取りまく海水さえもしだいに干上っていく。「風」はこの干上った海底の砂の中から第六と第七の太陽を掘り出す。これによって世界の中心にそびえる須弥山は煙をあげて燃え、火焰を吹き、しだいに頽落し灰燼に帰してしまう。同時に地の下の「水」、水の下の「風」も尽き、哲學的構成要素としての五大のうち四までが消滅してしまう。これが火災変であるが、世界はすでに梵加夷天の住む所まで燃え尽きている。つまりそこに「空所」を生じ、「光音天」がこの「空」を封じこんでいることになる。この「空」は大黒雲に被われている暗黒の世界として文脈から理解できる。この「大黒雲」「大黒風」をその意味からサンスクリットの *dhakata* に対応すると考えるならば、そこに暴風の神ルドラの姿が出現し新たな問題を呈示する。

世界はこの「空」で再び築きあげられるのであるが、「水」と「風」が世界再建のため重要な役割を果たしていることが理解できる。大黒雲から降る雨は「光音天」に包まれた空間に満ちると住風、持風、

不動、堅固という四大風によって安定する。そして水はしだいに減少する。その減少した水面を「僧伽」という大風が吹き、その水面の飛沫から梵加夷天等、諸々の諸天宮、須弥山……と以前の秩序を形成するが、これは「天地を生みしとき両腕をもって、翼をもって「煽ぎて」鍛接せり」とするヴィシュヴァ・カルマンの讃歌と符合する。つまり原水の飛沫から七宝の諸宮殿、須弥山を築く「僧伽」風にはヴィシュヴァ・カルマンの姿を想起させる。また四大風によって安定した「水」の姿は「太初において暗黒は暗黒に蔽われたりき。この一切は標識なき水波なりき。空虚に蔽われ発現しつつあるもの、かの唯一物は熱の力によって出生せり。」と唱う「宇宙開闢の歌」に通じている。ただ經典はこの空虚を光音天、遍淨天、果実天等の十三の天が包んでいるので完全なる空からの誕生ではない。ある特定の空虚の中からの再成を意味している。それは同じ「ナーサッド・アーシーティア讃歌」といはれる「宇宙開闢の歌」の中の「太初において無もなかりき。空間もなかりき、その上の天もなかりき。…」と対照的である。これはブラフマン、もしくは天に関する思想の年代的差異ばかりでなく文化的交流の広がりをも意味しているよう。

この世界の壊滅は經典では三回くり返される。火の次には水、その次は風が中心となり光音天、遍淨天までを破壊する。壊滅の原因が火であれ、水、風であれこの部分の主眼は「地の下の水、水の下の風」を尽すことにより思想的に、より徹底した世界の破壊を説くことにあったといえる。しかも水と風の災変が天上から始まり地に下りてくるという所は、火災変と根源的な違いを示しているといえる。それは『大樓炭経』『災変品第十二』の火災変の時と違って、

地獄の衆生、阿須倫、血を有し息をして生きている者までもすべてが一度人間に生れ代り、その死後災変の及ばない天界に再生し救済される、という記述に火災変との違いを読むことができる。また、災変の原因が人々の心の乱れに置かれるときこの災変の問題はさらに広い底辺を有することになる。

火災変における興味深い点は七日¹七の太陽の出現である。この複数の太陽が出現するという主題はSkanda Purana, Kalika Puranaにも見ることができる。これらは太陽の数を12と記しているが、その機能は世紀末の火としてのものではない。またこの12の太陽は一年を象徴し、大洪水の前の大旱魃を示していると考えられる。この複数の太陽の問題は三十三天の構成に関係があると考えられる。この三十三天を中央に帝釈天、四方に各八天を配するもの。天、空、地の三界に各十一天を配するもの。またSatapatha BramanaのYasu 神八、Rudra 神十一、Aditya 神十二、Dyaus 神一、Prithvi 神一もしくはIndra 神一、Pratapati 神一からなるとする考えがある。注目すべきはこの中のアーディティヤ神である。ブラフマナーではこの神は太陽神として理解され、その十二という数は一年を象徴するものとされている。しかもリグ・ヴェーダでは六以上のアーディティヤ神の名は記されておらず、後期の讃歌においてようやく七または八のアーディティヤ神が記されているという。これは經典成立に関する一資料とみることができよう。

1 これについては別稿に委ねたい。2 リグ・ヴェーダX—81—3。3 前掲書・X—129。4 Shastri, S; The Flood Legend in Sanskrit Literature, Delhi 1950, p. 85, 104. 5 リン・ヴェーダIV—III—3、X—68—8。(名城大学講師)